



「ねえや」のこと

波多野完治

環境学とか、又は環境心理学とかよばれている学問があつて本誌の協力委員の一人、山下俊郎氏は、日本でのその方面の権威である。同氏には「教育環境学」という名著もあるから、すでに知っておられる読者も多いかもしれない。

その環境心理学というのは、フランス、イギリス、ドイツ等、ヨーロッパ方面で盛んなのだが、フランスの環境学で、ちかごろ「ねえや」の影響が問題になり出した。

近代の社会では、職業に貴賤はないのであるから、「女中」

であろうと「子守」であろうと、又「ねえや」であろうと、それだからいけない、ということはない。

しかし、世の中では、命令をする人がえらく、命令を受け、服従する人が、その下である。という觀念が係通している。たくさん命令を出せば出すほどえらく、もっぱら服従するのは、下層だ、という考えなのである。

こうなると、メクラ判ばかりおしている高級官僚や、ひるめし重役などは、下の人の命令でうごいていようなもので、すこしもえらくなくてよいわけだが、世の中では「形式的に」命令を出す人がえらい、となつていゝらしい。形のみさだけでもとにかく、命令を出すことが多ければ多いほど、その人はえらいのである。

ところが、「ねえや」とか、家事の手伝をする人たちは、たいてい命令を受けるばかりである。いつけるのは、いつも主人であり、奥様なので、「ねえや」が命令をしはじめたら家の中がメチャメチャになつてしまふ。

家の中のオーソリティーが主人又は奥様にあるのである。

つまり、職業上のはたらきの相違が、身分の高下に自然にうつつて感じられてしまつていゝのである。

これが、世の中だけのことなら、大して問題にしなくてもよ

いかもしれぬが、こまるのは、これが「子ども」にうつって、子どもの性格形成に大きく影響を及ぼしてくるのである。

「ねえや」は坊ちゃまのいうことを聞く。それは主権が主人又は奥様にあるからである。本来ならば、子どもは自分の用は自分でしなければならぬ。しかし、「ねえや」のいるうちの子どもは、とかく父親の権威と、自分の力とを混同しがちである。えらいのは自分だとおもってしまう。そして、父親が威張るように、ねえやに威張ったり、大声を出したりする。

「子守」にはいろいろな問題がある。日本のように、ごく原始的な育児法から、ごく高度な科学的育児法まで、さまざまな方法が、全国にわたって行われていて科学的方法一本で規格化されていないところでは「子守」は、自分の国で行われている育児法を、しらすしらすに、あずかっている子どもにも適用しがちである、これは必ずしも科学的でないことが多い。

もっとわるいのは、科学的育児と原始的育児とがチャンポンになることである。今の心理学では、育児法が一貫性をかくのが一番いけない、と、教えている。母親が目をかけているときと、母親が外出しているときとで、二つのちがった育児が行われたと仮定してごらん下さい。大変なことである。

日本の今の家庭状態では、三人も子どものある人は、どうしても一人ぐらいいは、「ねえや」をおかなくてはやっていけない。台所などが機械化されてしまえば別であるが、マキをもして炊事をしている段階では、「ねえや」はどうしても必要である。こういう国での「ねえや」の心理その子どもに及ぼす影響。これはフランスばかりでなくわれわれの真剣に考えなければならぬ問題のようである。